

## Clyde Prestowitz, *Rogue Nation* (NY, 2003)

中山 弘正

タビュー記事に登場した。

### 1

ジャパン・アズ・ナンバーワンという声さえかかり、アメリカが必死に「再逆転」を目指して「日米構造協議」というほとんど「内政干渉」といってよいほどの圧力を日本にかけてきていた1980年代、それも後半に、C.V.プレストウイツの『日米逆転』が国弘正雄氏の訳で版を重ねていた<sup>(1)</sup>。日本経済の成功、アメリカの衰退を徹底して分析し、将来展望を論じた大作で、邦訳で500頁を越えていたのである。著者は、とくに半導体での日本の優位状況を踏まえて、日本の「カイシャ」の特異性及び「官僚制」とその「編み出した戦略」とを批判的に分析し、アメリカ側の問題点をも指摘しつつ、自ら実際に商務省の立場で<sup>(2)</sup>日本との交渉に当たっていたのである。当時、日本の電機業界の一角にあって著者と対面した或る日本人重役は、彼が非常に手強い相手だったこと、そして、出会った多くのアメリカ人の中でもとりわけ好きになれなかった人物だと評者に感想を述べておられたが、『日米逆転』を読めば、そのしたたかさはよく理解できると思われる。

この『日米逆転』の著書は、この2004年2月、『日本経済新聞』の「イラク派兵と世界」のイン

——共和党員であるにもかかわらず、なぜ最近ブッシュ政権の単独行動主義を批判する著作を出したのか。

「今や共和党員はタカ派で単独行動主義を支持している人々だとみなされがちだ。だが、伝統的に共和党はもっと慎重な政策をとってきた。アイゼンハワーやニクソン両大統領のように20世紀の偉大な共和党指導者は、だれもが多国間主義者だ。私はこうした伝統を支持している。」<sup>(3)</sup>

『日米逆転』の頃、日本側としたかに渉りあつた著者が、単独先制攻撃論をふりかざしてイラク侵攻に踏み切り、そこで足をとられているブッシュ政権下のアメリカ自身を、『ならず者国民』と自己批判的にとらえつつ、ブッシュ政権批判を展開していく。それが本書である。

### 2

『ならず者国民』ということで、フセインのイラクとアメリカとを同一視しようというのではなく、海外の長い友人たちでさえもがアメリカをそういう風なものだと見はじめている、ので付けた題だという弁解から著者は始めている。東京、ジャ

カルタ、シンガポール、……と從来の友好的な外国から見たアメリカはますます「醜く」なっている（p. 2）。グローバリゼーションは帝国主義の一種と見られており（p. 3），依然、大勢の人がアメリカを理想的な「丘の上の街」として見上げてはいるが、「ならず者」と見る人々が急速にふえてきている（p. 5）。

彼は、中産階級出身、保守的、共和党員、ボーン・アゲインのクリスチャン家族、大学でも保守的聖書研究会を創った、日本で2年勉強し、妻は中国人……などと自己紹介している（pp. 5, 16）。

今後は中国との関係が対日関係にも増して大きくなる、というのも著者の主張点の一つである。アメリカの貿易赤字はも早、対日よりも対中の方が大きい（p. 10）。アメリカは中国を潜在的脅威、とさえしてきたわけだが、これすら、じつは中国の方は何もアメリカの沿岸まで来てスパイをいつもしているわけではない（p. 11）。イスラエル問題はアメリカが余りにもイスラエルと近い関係者が多いので、とにかくアメリカはイスラムそのものを攻撃しているのだ、とますます見られてきている（pp. 13-14）。「アメリカ人」はまだ良いとしても、「アメリカ国家」は嫌いだという人がひどく増えてきている（p. 15）。ベトナムでのことを想い返せば、われわれは「帝国を建てよう」などとしたのではなく、「神なき共産主義」と聞いた、ドミノを防ぐという「純粹な動機から」だった、が、民族主義と独立という点はわかっていないかったのである（p. 15），と反省する。他の人々が見ている眼でわれわれ自身を見る必要があるので（p. 16）。〔以上、1. At Odds with the World — and Ourselves〕

ロンドンや東京に比べ、ワシントンもホワイトハウスも「帝国の都」ではないし、われわれアメ

リカ人は反帝国主義・反軍国主義を学校で教えられてきた（p. 20）。アメリカは権力も領土も欲しない、と。米国を「最初の、非帝国的スーパーパワーである」といった者もいる（p. 21）。が、2002年6月1日ジョージ・ブッシュは、この200年間のアメリカの戦略をひっくり返して、安全への唯一の道は「行動」だとし、弾道弾縮小の協定を破り捨て、まもなく（9月20日）「先制単独攻撃」を打出した（p. 22）。この劇的な転換は米国安全保障の戦略の逆転だったのみならず、300年以上に及ぶ近代国家の国際関係の基礎であったウェストファリア条約（1648年）の心臓部を擊つものであった（p. 23）。ニュルンベルク裁判でもこの先制攻撃が戦争犯罪とされたのである（p. 23）。ソ連邦崩壊後の諸とりきめをもホゴにするものであった。

世界のGDPの30%を占め、すごい軍事力を持ち（キティフォークの具体的な叙述）等々でも、即「ブッシュ“皇帝”」とはつながらぬはずだが、今やそうではない。この「帝国」の精神は、ゴッドだが、そもそも、God Bless America、という合唱が外国人には、どれほど奇異でいらいらさせられるものかアメリカ人はわかっていないのである（p. 36）。教会の出席率という点では、欧州やカナダよりも（そこでは10-20%）、アメリカでは半数、とモスレム世界に近い（p. 37）。男20人に1人は入獄した経験があったり、経済格差はものすごく、英語以外の外国語を知らぬ者も多い（p. 38）。この「帝国」への感情は、最近とみに「嫌い」が増えている。例えばドイツで1999年78%の「好き」は2002年61%へ、インドネシアで75から61%へ、アルゼンチンで50から34%へ（ロシアは37から61%へ）など、という（p. 45）。〔以上、2. The Unacknowledged Empire〕

タイの1997年の経済崩壊を論じ、1993–96年に米日欧から7,000億ドルもの資本が東南アジアに貸し込まれた点をはじめ、タイの具体状況を述べていく（p. 53）。マレーシア（マハティール首相）の抵抗も含め、他の諸国への波及を、そして、1998年のロシア、アメリカ自身のLTCM危機……と追跡し、こうした惨劇がグローバリゼーションの一つの顔であるのに、アメリカ人はそのことに無知だ、とする（p. 58）。綿花輸出問題を例に掲げ、アメリカは他国に自由貿易を強要しつつ、自らは補助金など保護策をとっていて、「偽善的なアメリカスタイル」のグローバリゼーションをやっている（p. 61）。鉄鋼でも、自国の信用をそこなうようなことをしてきた（p. 65）。

著者は、何度かの日本滞在で感じた日本の経済「奇跡」と例の1980年代の日米交渉時にふれて、米国の貿易赤字が2002年末に5,000億ドルを越えるようになるとは予想もできなかった、という（p. 67）。「グローバリゼーションで、アメリカは世界の多くを豊かにしたのだ」とも彼は考えるのである、アジア輸出の25%、ラテンアメリカ輸出の60%をアメリカは吸収してきたのだから、と（p. 69）。IMFでのドルの地位主張とその後の成り行き、1971年のニクソンショック、これでようやくアメリカは自由になり、アメリカ1国が、というのではなく他の国とともに、という位置についた（p. 71）。買うためには、ただドル紙幣を印刷すればよいという「ドル本位」制（p. 72）。世紀末のドル累計は約6兆、うち、1.1兆が外国投資にあてられている、という状況であった（p. 72）。この「ドル」と「英語」と「軍事力」、これらがグローバリゼーションを推し進めた力もある、アメリカナイゼーションがグローバリゼーションとなったのである（p. 75）。

しかし今や、反グローバリゼーションの運動も

相当の力をもつようになってきた（p. 75）。労働組合や環境派の人々はグローバリゼーションは破滅的なものと見ている（p. 76）。アメリカ主導のグローバリゼーションが問題であると見られていいるのである（p. 78）。〔以上、3. America's Game〕

次いで、石油の問題に入っていき、アメリカは1人当たりで日本人の2倍以上も石油を消費しているし、EU並みの効率になれば、ペルシヤ湾岸からの輸入などじつは不要、とする（p. 83）。アメリカは誕生以来、安いエネルギーを享受してきてしまった（p. 84）。19世紀にさかのぼると、石油はあり過ぎ、位だったが、自動車が出て来て情況が変わった——第1次大戦期、アメリカにはすでに350万台の車が走っており、1929年末には2,300万台で、世界の78%を占めていたのである（p. 87）。第2次大戦は「石油の戦い」そのもので、日本がインドネシアを侵略したのもそのためだし、結局日本の敗戦も石油の欠乏だったともいえる。ヒトラーが敗れたのもじつは同様で、連合国側は70億バレルを消費したのだが、うち60億はアメリカの供給だった（p. 88）。

第2次大戦後のアメリカでは、郊外の大住宅建設・大道路などで一層車は豪華で巨大なものとなり、1960→1972年の世界石油消費も、1日1,900万バレルから4,400万バレルに上っていた（p. 91）。サウジアラビアで石油を発見したのはアメリカの会社だったが、この中東への石油産出地の移動、民族主義の高揚、イスラエル建国などが事態を複雑化した（p. 93）。危機が重なり、オイルショックへと連なっていく。

エネルギー・知識集約テクノロジーでの日本の劇的な対米挑戦が起こり、欧州もそれに続いた（p. 97）。1990年代の石油事情、イラク対アメリカの中で、オサマ・ビン・ラディンも米国によっ

て育てられたのである (p. 103)。が、ともかく近い将来を考えると、93 億人 (2015 年)といわれる世界になれば、地球上の石油需要は、今の一 日 7,700 万バレルから 1 億 2,000 万バレル (2012 年) になると見られるので大変な事態である (p. 105)。目下アメリカは地球の 5% の人口で、エネルギーは 25% を使っているのであるから急な生活スタイルの変更はとうていできまい (p. 107)。日本は原子力の方にいくことを示唆しており、デンマークはすでに風力で 20%, EU も 2010 年には 22% を風力で、という計画である (p. 108)。〔以上、4. Running on Empty〕

環境問題も、もとはといえばアメリカが言い出しちゃだったので、今は bad guys と見られている (p. 113)。オゾン層の穴、の警告もアメリカだし (p. 115), 異常温暖化問題なども早くから取り組んできていた。1990 年代になって、EU やカナダ、日本が全体的取り決めて熱心になり出した頃から逆にアメリカは反撲している。そして、攻撃の対象とされるのを嫌うようになる (p. 127)。英独仏で社会主義系の政権が出来たこともあり、とくに例えばドイツでは、社会主義者と緑との連合政権で、米を押してくる (p. 129)。ヨーロッパは、単一欧洲通貨と環境政策とで結束してきていたのである。それらが、ヨーロッパの、いわば独立宣言であった (p. 129)。「京都」には、中国など途上諸国はただ監視に来ただけで、開発最中の彼らは自らは縛られたくないのである (p. 131)。欧洲諸国は、4% の人口なのに [p. 107 では 5% としているがママにした]、地球汚染の 25% 以上の責任があるアメリカを、「偽善」と見なした (p. 135)。アメリカの生活様式の変更を欧洲筋は要求した (p. 138)。

しかし、ブッシュ大統領は、環境主義はソ連崩

壊後のコムニストの仕業であるぐらいに思い、憎んでおり、科学的警告も信用せず、「京都議定書」も米国経済を悪化させるだけだ、と見ている (p. 139)。どれほどアメリカに負担でも、「9.11」で支援してくれている友のためにも、米国は京都議定書に署名すべきなのである (p. 142)。〔以上、5. Who Lost Kyoto?〕

アメリカはいつも法の支配を主張するが、自らは法の上にいる、というところである (pp. 143, 160)。アメリカが埋めた地雷は——例えば、アフガン戦争でムジャヒディンにソ連軍は追い出されたが、アメリカのまいた地雷は残った——カンボジア、ベトナムなど 70 ヶ国以上のところで、1 億 1,000 万も残っていて、年 26,000 人以上が死傷している (p. 145)。クリントン期にはこれの廃棄の方向がたまたま、ブッシュはすぐひっくり返してしまった (p. 148)。他のさまざまの兵器で、過去数 10 年に殺傷された 400 万人のうち、90% は一般市民、この 80% というのは婦人・子供であった (p. 149)。「アメリカは恥を知れ」という声は多い (p. 151)。「9.11」以後は、何かと、アメリカ人を守る、という口実で核兵器、化学兵器も含め、武器が大手を振るようになった。

国際司法裁判所 (ICC) の問題でも、次第に反対が無理になって来て、条約そのものがスタートするときに、なお、アメリカは世界の中でもユニークな役目をもっているから、と抵抗した (p. 159)。

武力信仰と国家主権の強調と並んで、軍需経済がアメリカの軍国主義を形づくっている (p. 161)。全冷戦期をとおし、15.8 兆ドルもが軍事に投じられた。「ミサイルギャップ」など本当は存在しなくても、その掛け声で大量にミサイルが生産されたり、「スターウォーズ」に至っては本当に多額の資金が投じられた。冷戦終了でも、プログラム

は消えはしなかったどころか「ミサイル防衛システム」等々に姿を変えただけである (p. 162)。2002年11月頃で、世界中にアメリカ製ミサイルは70万以上も配備されていると推定される (p. 163)。兵器産業が主要輸出業種で、雇用を提供していることは周知のところで、闘っているどちらの側にもアメリカ兵器というところが多い (p. 164)。

単に武器を売っているだけでなく、アメリカは戦争の指南役でもある。何と多数の将校や軍人を訓練し教育してきたことであろう。アメリカの特殊部隊は目下140カ国以上に展開していると見られる（予算30億ドル）(p. 160)<sup>(4)</sup>。

ウォーラースタインが「アメリカは、国際ボーカーゲームで、軍事のカードだけに頼っている」と述べたことがある。われわれは、好戦的人間だと思われたくないが、本当のところただ武器にだけ頼っているのに、「平和愛好」者だと受けとめられると期待することはできまい (p. 170)。  
〔以上, 6. In Arms We Trust〕

アメリカの戦争の歴史も振り返って、第1次、第2次世界大戦は、正義の戦争であった、本当の「悪の帝国」から世界を救ったことは疑いない (p. 174)。それで、戦争は終ったのだから、boys back home の時が来た、誰も「帝国」など樹てようと考えてはいなかったのに、冷戦がそれを全く変えてしまったのである (p. 175)。1946年3月5日、チャーチルのワシントン演説……。そして「国民の安全という福音」が全てに優先されていくことになる (p. 176)。「反帝国主義という帝国主義」、ただ、裏返された孤立主義ともいべきもので、「世界がアメリカの延長であるかぎりで、われわれはその世界の市民となる」というものであった。物的なものを獲得しようとか征服と

かは関係のない高貴な十字軍であった。が、朝鮮戦争等々干渉戦の中で、アメリカは海外から恐怖と不信の眼で見られていたことを忘れてはならない (p. 177)。朝鮮戦争についての記述に続いて、現代の南と北の政情、とくに金大中「太陽政策」にまで触れている。「朝鮮の保護」のために米軍が必要なことは、反米的政情下でもコリアン自身が知っている (p. 180)。インドネシアとの関係 (p. 181-184)、ついで、イラン (p. 184-186)、アフガン (p. 186 ここでソ連への勝利を祝うのは早すぎた、タリバン体制ができてしまったのだ)、そして、イラクについて述べられる (p. 187～)。1991年1月の湾岸戦争に先だつ前年のイラクのクウェート侵攻に関しても、サダメの打診に対し、米国大使 A. Glaspie は、「われわれはアラブ同志の境界線をめぐる意見の相違に关心がなく、ブッシュ（父）大統領も、より善くより深い関係を望んでいる」といった、とされ、侵攻後、手のひらを返すようにヒトラーの如く米国から非難されサダメはさぞ驚いたことだろう、としている (p. 189)。〔以上, 7. Peaceful People, Endless War〕

「イスラエル、台湾、宗教、ロビイ」の4語で、アメリカと世界との相異が説明できる。

イスラエルはアメリカの51番目の州の如くで、イスラエル側のパレスチナへの攻撃は注目されないし、すぐ合法的自衛とされるし、イスラエルの戦争はアメリカの戦争、である (p. 194)。兵器もアメリカ製だし、パレスチナ側からは深い反米の気持しか出てこなくても当然である (p. 195)。著者のイスラエル滞在のときのいろいろの体験も交えて展開されている。イスラエル政府は、新軍事援助に40億ドルも求めている (p. 197)。原理主義クリスチャン達の、聖書の約束のようにイスラエル全土がイスラエル人に属するまでは平和は

ない、との声さえする。投票が示すところでは、むしろ、パレスチナ人に返すべきところは返して、という人々が多数なのであるが（p. 199）。キャンプデービッドの 1993 年-2000 年には和平への希望が感じられたのに（p. 199）。そもそも、イスラエル住民 500 万がユダヤ人で、120 万がアラブ人、しかしあラブ人の方が出生率が高く、占領地区のパレスチナ人は 350 万である（p. 201）。西岸はもう 35 年もイスラエル占領下にあり、異常である（p. 202）。アラファトは、過激なハマス、ヘズボラなどの挑戦も受けつつ、パレスチナ分離国家を目指している（p. 207）。

全くアメリカに依存しているイスラエルなのだから、アメリカはどうしてもっとコントロールできないのか。「ニューヨークとフロリダだよ」というある答え。この 2 州での投票で、ユダヤ人がもっている力と、強力なイスラエル・ロビイである。それらに加えて、原理主義的クリスチャンの連合がある（p. 211）。米国の政策はますます世界からは疎外されているのである（p. 218）。

台湾問題でも、そこに、アメリカは、潜水艦など兵器を沢山売っていることも、中国を刺激している（p. 220）。19 世紀末、20 世紀初頭、アメリカのプロテスタント宣教師にとって、中国を「救う」ことが大事な目標だった、「キリストの目的とアメリカの目的はひとつになって」というわけであり、蔣夫人などが注目させていた（p. 221）。しかし、その後の共産党軍の勝利、蔣軍は、ニクソンショックまでの 23 年間、台湾で「中国」のフィクションとなったのである（p. 223）。冷戦崩壊で、対ソ連の半同盟国としての「中国」の役目は終了した（p. 225）。けっきょくアメリカは、無用な緊張を作ってきていたのではないか。現実の場所、現実の人々を見ずに、理念の運び屋として見てきていたのではないか

（p. 226）。〔以上、8. Wagging the Dog: Two Tales〕

1980-1991 年は、東西ドイツの統一、湾岸戦争、ソ連崩壊……と続きロナルド・レーガンのいう「悪の帝国」も崩れ、ファシズム、コムニズム、デモクラティック・キャピタリズムの間の 20 世紀を定めていたイデオロギー闘争は終わり、民主的資本主義が唯一生き残った（p. 227）。アメリカには敵がもはやいないようにさえ見えた。「米大統領は、ロンドン、パリ、リヤド、モスクワ、北京、ソウル、ジャカルタ、カイロ、メキシコ、ブエノスアイレス、どこででも歓迎され」たし、多極的協力の基礎を置きはじめた、あの 1946-48 年頃のような「チャンスと希望」の時が来たのであった。こんどのは、「グローバリゼーション」だったが、それは諸国をより民主的、より豊かにし、平和と安定も増す、と思われた、「美しい夢」のときだったのである。しかし、アメリカの指導者たちは、その戦いに勝つやいなや、平和を誤って取り扱ってしまったのである（They began mismanaging the peace）。彼らは、あたかも冷戦と 20 世紀とがまだ終っていないかの如くにふるまい始めたのである（p. 228）。軍事の比率、海外の米軍基地はむしろ膨張し、非軍事外交面の軽視がはなはだしくなった等々。グローバル化は貧富格差を広げ、それを見せやすくしてしまった（p. 229）。

ヨーロッパは次第にアメリカを（rogue state）と見るようになり、敵対さえするようになっていった。2004 年 6 月、10 カ国が加盟し、4.5 億人、GDP 9 兆ドルとなれば<sup>(5)</sup>、EU は、米の 10 兆ドルに迫り、日本の 2 倍、という巨大な力をもつ、アメリカは一極ではやれなくなるだろう（p. 233）。ローマとビザンチンが長年対立したのにも似て、

アメリカとヨーロッパの異形の対立は拡がるかもしれない（p. 234）。アメリカから見るとヨーロッパは Godlessness（無神的）で、ファシズムもコムニズムもそれに由来し、アメリカは 2 度もその危機から救ってやったし、ヨーロッパは眞の民主主義でなく、擬似貴族エリートが操る官僚の集まりにすぎない（p. 237），というのである。

アメリカのヨーロッパ評価はアンビバレントで、ライバルともパートナーとも、時により見方が動く。アメリカの権力のかけにいながら、責任は少しもとろうとしない（p. 241-242）。だが、ともかく、グローバル体系は米=欧同盟に乗っているのであり、これが崩れたらそれ自体も崩れるであろう（p. 244）。

アジアについても、朝鮮、日本、中国（pp. 240-256）の順で詳しく論じられていくが、アジアからの見方はアメリカ人の見方と異なっていることが強調されている。ラテンアメリカ、中東、南アジアにも言及し、アメリカとその親しかった旧友（韓国、欧、日、東南アジア、ラテンアメリカ）との間の緊張は危険な水準に達している、またロシア、インド、中国などとは昔よりは良くなつたが、不安定である（p. 266），と警鐘を鳴らしている。〔以上、9. Friends and Foes〕

じっさいは、ヨーロッパ人以上に、アメリカ人が NATO を必要としているのだろう、サウジ・アラビアも米軍基地撤去を求め、韓国も、日本もやがてそれに続くだろう（p. 268）。

2002 年 9 月のブッシュ大統領の“先制単独攻撃戦略”が検討される。これは明らかに「無限の膨張」、「新しい帝国主義」といわれても仕方がないものだが、これは成功しないだろう、とする。

第 1 に絶対的な軍事力による安全、などというものはありえない。第 2 に、アメリカ人は nice

でも、世界の他の人々が必ずしも同じように見ているわけではない。諸民族は、個々人と同じで本当に「いろいろ」なのである。伝統、生活様式、価値観はそれぞれ尊ばれたいものなのである（p. 275）。第 3 にアメリカの「救世軍」は日々働かなくなっているし、第 4 に経済では、われわれが思っている以上にアメリカは他国に依存している。第 5（最後）に、アメリカはしばしば愚かで悪いことをやる。帝国主義者として上手くないのだ、人々がわれわれを好きになってくれるかどうかという点に熱心すぎるるのである。ではどうしたらいいか。それはブッシュも口先では言っていること、「われわれがもっと謙虚な国民になれば」尊敬されるのである（p. 276）。ネオコンは保守でも何でもなく、ラジカリズム、エゴティズム、冒險主義にすぎぬ。眞の保守主義は、メシア的でも教義的でもなかったのである。そして、「小さな政府」のはずであるが、今のネオコンは「大政府」である。保守でも、自由主義でもなく、ただの無責任である（p. 277）。

対日関係では、日本はもっと大人になって、政策決定をすべきであろう。沖縄基地は日本に返すべきだが、憲法も日本人じしんが考えなおすべきであろう（p. 280）。「京都議定書」にも「国際司法裁判所」にもアメリカはすぐ署名すべきだ。そして、2 位以下の 15 もの国々のを併せたほどもの防衛費を出すのを止めるべきだ（p. 281）。エイズ、水、森林、砂漠化、人口 等々グローバルに解決すべき問題は余りにも多い。他人の問題もわれわれの問題であり私自身長老派の長老の 1 人としていえば、キリストは、民族や権力のために来られたのではなく、福音を力で広めるようなことはしていないのだ。キリストは、1 人 1 人、その魂を救ったのであって、アメリカの教会の救いは、教会と国家の分離だったのである。神がアメ

リカのみならず全ての国民を祝福されるように祈るべきである（p. 284）。〔以上、 10. City on a Hill〕

全な良識的議論が、一日も早く、アメリカの中で勝利していくことを願わざにはいられない。

### 3

論旨はきわめて明快であろう。

アメリカやアメリカ人の「好い」ところを積極的に肯定しつつも、1990 年代以降のアメリカがとりわけ「一極覇権」の中で、暴走して、他の諸国民から、お前こそ「ならず者国民」である、と指弾されているという現状をきわめて素直、リアルに書いている。そうした現状であるのに、ブッシュ大統領やネオコンといった今の執行府が、またこれに引ずられる多くのアメリカ人が、アメリカがそういう風に旧友好国民からも見られていることに気づいてさえいないことを警告しているといえよう。

グローバリゼーションが、こうした米国民と外との差異・相異を拡げ、冷戦が終了し、21 世紀になっているのに、冷戦期以上の軍事戦略や武力主義に頼っている現共和党ブッシュ政権を強く批判している。

ブッシュ大統領と同じ共和党の中に、まだ、これだけの見識と勇気とがあることに、アメリカ民主主義のプラス面を感じることもできよう。ただ、こうした、いわば、「健全な」そして多少とも、自己批判の能力を備えた「保守党」が、共和党から現「異端児」を追放し、アメリカをまともな路線に引きもどす力がどのていどあるのかは評者には判らない。それにしても、こうした多少とも健

#### 注

- (1) C. V. プレストウィッツ Jr. 国弘正雄訳『日米逆転』（ダイヤモンド社、1988年初版、89年10月6版）原題は、Trading Places. How We Allowed Japan to Take the Lead.
- (2) レーガン政権下で1981-86年、商務長官特別補佐官などとして、とくに半導体日米通商交渉にあたった。退官の後、現在、アメリカ経済戦略研究所をたて、所長を務める。
- (3) 「自衛隊派遣 議論未熟危うさ残る」『日本経済新聞』2004年2月6日8面。このインタビュー記事の出たとき、私はちょうどこの「著作」（原書）を読んでいたのであるが、しばらくして、村上博美『ならずもの国家アメリカ』講談社が出ていたことを知った。原題に「国家」も「アメリカ」もないが、内容は当っている。
- (4) デイナ・プリースト 中谷和男訳『終わりなきアメリカ帝国の戦争』アスペクト、2003年12月、は、地球地域区分ごとのアメリカの軍事司令官たちこそが眞の外交をやっていて、文民外交官は二次的存在にすぎぬこと、また世界各地に展開する特殊部隊について、取材した女性ジャーナリストの報道である。なお、「冷戦が終わると、アメリカの戦略は攻勢に転じた。……、この攻勢の戦略は、現在でも健在である。」等とした ハリー・G・サマーズ Jr.『アメリカの戦争の仕方』（杉之尾宜生・久保博司訳、講談社、2002、3）も参考になろう。
- (5) じっさいは、2004年5月1日に10ヶ国加盟は実現した。エストニア、ラトヴィア、リトワニア、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、スロヴェニア、マルタ、キプロスの10ヶ国で、ほとんどが旧社会主义圏の諸国である。

〔AD 2004. 4. 10〕

（2004年5月7日経済学会受理）